

今日アメリカでは自分が日本本国政府と共謀して闇討を食は
したのわけはないかといふ疑ひを抱いて、今その事で自分を調べてみる
が、併し自分は全く何等真珠湾攻撃を事前に知つてをうた
ことはない、と野村さんは言ふのである。

野村大使は日本に歸つて来てから、牧野伯爵には多少日米
交渉の話をしたが、その他の方面に対しては殆んど全く話をしておな
い。幣原首相にも全く話をしておない。幣原首相にも暇のある
際に中つくり日米交渉の経過を話したいと思つてゐるとのことである。

(了)

昭和二十一年二月二十三日(土曜日)

元海軍技術大佐 伊藤 庸二氏 談話速記

戦争調査會事務局

私は只今元海軍の史實調査部に属して、恰度、
ちらの仕事と同じ仕事、その意味では下請の仕事
としての波動兵器関係の史實調査―勝てば戦史
編纂であるが、敗けて史實調査の仕事に関係し
十一月から開いて今收箇月か閱した。
本来その資料を持って参すべきであるが、本日のと
ころは極く概畧の思ひ出を申上げる。
いろ／＼亦問題に觸れ、と思ふが、大体次のやう
な順序で申上げたい。それは電波兵器屋とい
ふか、波動兵器関係の技術のレヴェルと海軍の持
つてゐた自覺といふ問題、研究の總結集に對
する海軍の考へ方、電波兵器を實際に研究、製造
して行く働き方、部外への呼掛けの問題、組織の回

題、以上の問題も大体申上げることにする。

まづ第一に日本國內に技術研究のレベルと海軍の自覺の問題であるが、これについては二様に見られてもった。技術プロパーの陣容は非常に自信がなかった。しかし國內の全体の歩みとして相當自信ありといふことで、作戰部門は相當自信があつたやうである。それで私達としては始終話が出ると相當口論に至るまでに、デイスカッションが強かつた。日本の技術研究のレベルを一番端的に示したのは昭和十六年の遣獨伊軍事視察團の調査報告である。私はその時その團体に属して野村大將が首班として向ふに行つたが、その時の結果から見ると、研究者の陣容だけいへば、全体として日本は

ドイツの十分の一乃至十分の一である。アメリカの陣容は研究者の数だけで、ドイツの約三倍である。ドイツの空軍當局はいつてをった。これによると日本は大体十分の一乃至十分の一の技術研究があつた。と考へていら。幾何平均を取ると大体四十分の一程度のものがアメリカに對するものであつた。

量産力に於ると、紡績のやうなものは除外して兵器に属するものは無論わがふのたが、大体百分の一程度といふことが推測出来た。そこで平均すると大体十分の一乃至十分の一といふのが、技術の本當の力ではふがうかと、當時報告されてくる。然らばいざ起ら上つた場合に大体十倍の努力をするにあらずば技術は對等には歩けふといふ自覺を持って海軍と

内閣調査局

しては起ち上ったつとりぐとつた。
ではその四十倍の研究をどうして充すかといふ
問題である。一人の力には限りがある。そこで研
究の、總結集といふものを私達としてはいかに
ても考へねばいかぬ。これは他、面からいふ論然り
であらう。それを考へて方々に呼掛けた。その一つ
く、勅さば悉くうまく行かふかつた。それは第
一にはわが国の能力が是りあつたこと。第二には
國民の自覺が底かつた爲である。そこで技術面
が敗れたが故に遂に敗戦の惨状に立至つたと
考へてゐる。この總結集の一つの方法として單一
目標に向つて全力を集中することが當然であつた。
それに対しては軍令部の要求大本營の要求を中

心にしてそれに遮り無二進むことを私達としては
いつも念頭にあつたわけである。部分的にはそれ
は相當充たされてゐた。だが全体的にそれかうま
く行かふかつたことはこれまたわが国の不敏の致
すところであつた。それは與へられた要求が與へら
れた期限以内に出まふ。その内に戦況は進んで
しまふ。さうすると前の要求と變つた要求が出
来る。その要求に対して私達としてはまた新し
い研究の陣立てから方法を案劃し直し、前の
ものはすべて新しいものに變らざるを得ないとい
ふことが、昭和十六年から二十年に至る全期間
に亘つて考へてみて、六回ほどあつたと記憶してゐる。
元素研究といふものは平時において簡單な兵

器が四箇年の研究の期間をどうしても要求して
てくる。これは簡單な無線電話機、通信機等の
研究でさうである。新しいプリンシプルのものなら
まだ、掛る筈である。それを六箇月以内に量産
にかけた兵器化する所に持つて行かなくてはなら
ない。この戦争は失敗の態勢にあつたが、正しくその、
うにわれは歩いてしまつた。それだけの期間を絶
対的に必要としてくる。これらの兵器を、前のものを
止めて次のものに掛る。その次の戦況にあいては、其
のものがまた必ず要求される。そのシーソーを二回
ばかり繰返した。その時に新しい陣容をそれに當
てるといふ問題は殆んど成立しあつた。これにはいろ
くの理由がある。結局新聞或はいろくの學會その

他でいはれてをったやうに、軍部の研究者が自分一人で
小さな領域で働かざるを得なかつた。働いてしまつた
といふのが敗戦の一つの相であつた。結局研究クの
總結集は以上のやうな恰好で私達の部門にあい
ても、これで勝てば非常に面白い記録で、いふに出
来なくてもよく勝つたといふことにあつたであらうか
敗けた現在にあいては非常に悲惨な記録にあつ
てくる。

もう一つ相當大きな話として、合同することが強く
化される所以であるといふ根本の錯誤に技術陣
容は全面的に陥つてをった。大きな會社で或るもの
を依つてくる。レツテイルが大きいから大勢掛つてくる
かといふと當時電波兵器として最も緊急な製

造を叫ばれてもった真空管に女の子と僅か数人の者が掛つてもったといふ事実がある。レツテルの大きい方が強力なものでない。寧ろばらくにしてをった方が強力であったといふをかし出現象に澤山逢着して来る。

もう一つ大きな原因は統制といふ言葉が悪い。語呂から来る感じが、統は統べる、制はブレーキをかける、といふので、研究においては四十倍、量産においては百倍の努力をしなければならぬものにブレーキをかけた。他の奴が何をいふかといふ感じを制といふ字が與へるかも知れない。統進とすべきであるといふ余分なことをさへ私達の間にいはれたが、この統制

といふ事実があらゆる方面にマイナスの作用をし、お互を非常に苦しめた。

もう一つは組織力の活用が私達にはどうしてうまく行かぬかであった。個人々々としては相當はつきりした力を持つて来る人間が一朝共に歩くといふことになると勿ち勤めぬかぬかある。一対一の電話は非常に簡単であるが、十人が任意に話合ふことになると線が非常に複雑になる。百人になると一人の百倍では無いといふ電話の組合せの問題と同様にちよつと人間が殖えると困難に於て全面的にうまく行かぬかであった。この點は終戦後に聞いたところによると、敵の原子爆弾の研究組織は十万人の人間を勤めし、あの仕事プロパーに打込んだ費用

は十九億五千万弗だといふ。それらの規模を比較して、われくの所では電波兵器だけに僅かに千人、海軍部外の方々も勤きも入れて全部で五千人程度だと思ふ。しかもこの全体の勤きが動脈硬化を来してしまつて拙く行つたのに敵の方は非常にうまく行つた。組織の力をうまく調和することが出来ないのは非常な缺陷だとわたくしは戦争の中途が及省し惱んで来たが、遂に力及ばなかつた。

次に電波兵器と磁気兵器について簡単に説明する。電波兵器の活動の可能否とは、學界としてはどこからともなく匂つて来る。必ず世界中同時に方々で始まるものだといふ。フォーミュラをこの問題も取つて来た。昭和十一年に私達は海軍技術研究所の一角でこの

仕事を取上げてみた。その濫觴は昭和四五年頃であるが、昭和十一年にはっきりと表へ出て来た。それで二十五種の電波を以て昭和十二年には鶴見沖の観艦式で軍艦をキャッチ出来た。しかしそれが非常に正確な實驗でない爲に遂にまづやるべきであるといふことでは、私生兒として研究を續けて来た。とてもかつかいふ問題に対しては豫算が出し得なかつた。また担当者者の私としては強引に豫算を掠奪してもやるといふまでに熱を上げ得なかつた。これは海軍の實情で陸軍のはまた違ふ。そこで昭和十六年に私が視察團員の一人として向ふに行く時に、どうもこの問題は相当用いてをる向題に違ひない。もしさういふものがあつたらばあらゆる方法でこつらに連絡を執るからこつらでも始めて

くれと部下に言いあひて出掛けた。本来この問題は地球の外部を作つてをイオン層の測定を男親としてレヴィジョンを女親とした子供をして生るべきものであると私達は考へてをった。結局技術としてはレヴィジョンの技術を使い、考へ方としてはイオン層測定の考へ方を使う。それで成立するものであると考へて、高柳賢次郎氏にもしあつた場合には及クしてくれと言ひあひて出奔した。それで向ふのボーヴァー海峡に行つて見たところ、異様な空中線がある。あれは何だの分らふといふことで、執拗にそれの見學を迫つたところ、ロリアンに於いてはじめてそれが許されて見たのが、私が見し、電波兵器の最初のものである。それで三月二十幾日頃構成その他を長文電報で打つた。さうして四月

十日頃その電報を基準にして、父無し子でよい、本格的な研究に日本の海軍として着手し得た。爾來研究を續け、私が十月六日に日本に歸つて来た時にはドイツの形式を真似た兵器は既に完成してをった。私は自分の見て来たものと比べて、形は多少田舎染みてはをるが、性能の或る程度比較さるべきものを日本の海軍で見つて非常に喜んで、昭和十年以來わかれのやつてをった仕事は電波兵器本来の形であると考へてをったが、その方は一進一退で相當金をかけてもうまく行かぬか、これは関係者が殆んど不眠不休で幾日もし、鶴見の沖に舟を撃ついでそこで寝泊りしぬから涙ぐましいくらい奮闘してくれてあつた。それが私が歸つてから約一ヶ月して漸く出来たと

いふので皆が泣いて喜んで事実があった。
ドイツの真似をした兵器は千葉縣勝浦に第一號機
として配置された。それが後に勝浦の電探がどうか
うといはれたものである。この工事は非常なスピード
工事で、電波兵器プロパーでは無いが一キロ半の山道を
八メートルの高さに牽引車附のトラックを引揚げ
のに約十日間で工事が完成した。これはトット、オルカ
ザチオンのやり方を向ふで見えて来たので、柄にもなくその真
似をして、全部一任といふ方式で土地の方の力を仰
いだ。これは十月九日に私達が見に行つて、十日は註
文決定、二十日には既に山の上に自動車か着いた。
かういふ行き方で行けばあるほどうまく行くわいとあ
互に非常に喜んだ。これは後に高松宮様にも特に来

て戴いて非常に喜んで戴いた記憶がある。

その年の五月か六月頃キスク進攻作戦があった。その作
戦にはドイツの真似をした電波兵器が各船に一は
付き、日本で前の方やつて来たものと附いて堂々と
乗出した。これは積極的作戦果は擧げ得なかつた
が、逃避作戦には使へた。霧中の航行には役立った
といふ記録を持って来た。これはわたくしの部下
が軍属(海軍の工員)としてその作戦に従事した。あ
は要求が幾何級数的に殖えた。その間人員の増強そ
の他もあつたが、向せい急激な膨脹であつたので、本當の
動きと要求されて来るもの、動きのマッチングはだんくと
悪くふつて来た。

この時の考へ方として、これは自分ばかりを非常によくいふ

やうで変手百ふことにふすが、事実海軍といふ所は
（陸軍も然りとして）就職場所としていふ所ではふかつた。
學向に對するアンビションを悉く封鎖され、どんな仕事
があつても表に出せぬ。これは優秀な青年を吸集する
所以ではふい。言葉は悪いが、纔かに胸に勲章をブラ
下げることを喜ぶ連中と金に困って委託學生に行くも
のを以てわれわれの時代の連中は形成されてゐた。こゝ
人間が極く僅か、私の大學卒業の時には全技術員
に對して十九名、それも途中でどんく死んでゐるので
何にも残つてゐらぬ。戦雲が急にあつてどんく加はつ
て来た大勢の諸君の中には大變ふものが入つてゐる。
しかしこれではまだ本當に間に合はふかつた。研究力を
も總結集せねばいかぬ。生産力も總結集せねばいかぬ。

心棒が細過ぎる。しかもそれが鉛である。これは私が前か
ら見てゐた見方である。故に何とかして心棒を太らせ
る方法を執らねばいかぬ。さうしていろく、と海軍部外
にもお願ひしたが、あまうまく行かぬかつた。ピッチャー
は極めて肩の悪いヒョウクの人間で、キッパチャーが沃山
ゐる。何かいふ球が出る、必ず受けてやる。悪い球が出
たら外してやるといふ恰好で、到頭この戦争は終結して
しまつた。その間心棒を太らすのに僅か役立ったのは
昭和十八年であつたと思ふが、漸く心棒太らせの論が出来
て、東大、阪大、浜松高工、國際電氣通信株式會社、放
送協會、鐵道省、逓信省工務局、電波物理研究所と極
めて密接な関係のある會社の一部、これの人間と海
軍プロパーの人間に引入れて投力してもらふことになつた。組織

全体として何とかあ援け願ひたいといふので殆んど懇願の恰好で来て戴いた。そうして終戦に赤るまでその方はそのまま、完全に心棒として動いて戴いた。それで心棒が何かしか太った恰好であった。

たゞこの点について困ったのは、陸軍と海軍の考へ方がマッチしてをらふかった。陸軍は心棒を太らせる心要はふいと考へ、私達の方は心棒を大事にせねばいかぬ。これはいろいろの見方があり、ディスクッションがあった。海軍は何でも自分の方に取り入れやがるのだといふ非難を始終受けてとった。本當にこゝままで心棒がふいうたから、心棒のふい獨樂が部屋中馳け廻るやうにふる。それを止めなければふぐぬ。それも部外から全員を入れようといふのではふい、心棒を或る程度までせむ太らせてもぐい

たい。日本の海軍は今度のやうな技術戦争をしようとは夢考へふいでぬ。昭和十七年七月頃、時の軍令部長永野元帥が私達数人を呼ばれて技術の必要性を話さうと仰し、いられた時、日本の海軍は技術といふものが、いほど大事な役割を演じようとは夢々思つておふたつた。と明言された。事実によつてもはつかりして来る。非常に細い心棒で大きな獨樂を廻さうとした。これが一つの敗因だと考へる。

その技術研究としてはいろいろ必要が方々から出て最初一件の二件であつたものが、陸海軍協同で問題をセレクトしてふほミナ件がらむの問題が、かういふ場合にはとて、あゝいふ場合にはどうといふことで、われ／＼の頭にいっ／＼降り冠つてとった。敵のレーダーについては、既にキスク作戦の當時海軍としては着相心かはつたりしてとった。それは昭和十一年から具体的に着手し

内閣調査局

たがわしく、ウレタンを以て遂に、あて及い得ないで居った。この
問題をやってくれといふことは海軍の陣谷プロパー以外の所
には随分所頼のして居た。電波暗視機といふレーダー
装置は日本で名高いものであつたが、それと同巧異曲かも
のは海軍としては、型が一應出ま上つて実験に移したか
否かといふ状況で戦争は終つた。

それから日本の敗戦の一つの大きな因となつた原子爆弾のことについてわれ
／＼の立場から一言申上げる。原子爆弾は戦争が早くから、あつたものの
の有り得るわけは互に合つて居た。これは別に先んじて居たもの
ない。それ以前十七年の二月であつたと思ふが、海軍技術研究所、電氣
研究所、佐々木少将が親方となり和幹事で各員長として
長岡半太郎博士に依頼して、自軍中の相當の學府全部を集めて
我々のために一ヶ月間この研究を促進すべきや否やと一月間満
々二週づつ會を開いた。この問題については新聞といふ／＼あつた。こ
れは、はつきりと認めておくべきである。その結果、まづ今回の戦争は役
にたつた。さういふものや、しりあつた。目的は、はやいことであるといふ結論
に達した。それ以後、(と)しては、自分の立場と辯護するやうに思ふ
痛が、遂にそれによつて、無くてさうを得ないといふこと、
退いた原子爆弾は、

六十発のあまてこらにわたつたを聞いてこらに六十発の原玉爆弾を造るに
十三万人の人間と十九億と千五百万の金とを使つて造る。これは我々の動定で日本
東部の一千万や二千万の金とあつた所での物の数に成つたと思ふ。この当時の
撃つたかういふ問題を考へるかういふ事だといふことと遂に馬折矢盡きた
感とであつた。これはこのかうの事をやるも作はれぬ興味の興味とていつた
りたし、かういふことがあつてはあつていつた。戦争の始まる四年
前にはアメリカはウランの原素の輸入を禁止した。これはかういふことと山中に五
千五百万の得能心の知れた研究機関と造つた。この二つはかういふ情報に入つて
つた。その二つの事案からいふと、これは遠くふいと云ふことを知れば
居させぬ小石。以上が海軍の事案とては打撃打突つた原玉爆弾の日本にお
ける経緯の一端の事案である。これは小石は、飯島先生の動き、陸軍の
動き、増田中將の動きであつた。これは日本の全部の情勢、しつと、この以
外は、西田先生も海軍の事案が一つ下つてつた。

次に磁気探知機、これはループを海の中に入れて置いて、潜水艦とか飛空の
鉄塊が通ると地球の磁気場がゆがむと動揺する、その動揺のゆがりを
電流表でうつかしてつて上を鉄塊が通つたことを示す事案を知つてつと
する。これは開戦と同じに十二月九日の敵の潜水艦が瀬戸川海に入つた形跡を
これを探し出す方法は何といふ問題が方々にあつた。これは研究を促
進して行く一つの方法にもなる。これは日本の関係の向上つたつたとい
た。知れば、つて北海道で日艦を観測した。これは地球の磁場の変動の事
案をやつたことがある。これは思ひあつた。自轉車をさへも御着いた、潜水艦が
うきうきした、これは水とふつては火象象の磁気観測のたる形跡に知
り部下を特派し、長岡先生の知恵も借りし、つてつた。十二月、終り
には既に方冷がついた。その後、香港陥落の後、つてつた。同じものが向う
あつた。結局日本より向うの動きが早かつた。向うは、これは既に手掛りし
てつた、これは必要に應じて起つた。これは私の部下がやつた、海軍の

優者不青年であつた。そのは事のたゞ今も戦死した。三井技術少佐の動きが的中して忽ちうまく行った。どうして日中の落湾には急ぎ整備すべし、さういふ動きもあつた。

次の部外への所掛りの問題、陸海軍技術委員会（航空を除く）航空の方には何とか委員会と、この小とコンパルのものか、あまた。

オニロあまたの海軍材料技術審議会でも八木先生、坂山先生といふやうな関係のあつた大御所と強くと網羅して加藤大將が委員長をやつてつた。これは總ての海軍の統制は解除して一號兵器だのことにして部外者のわし／＼が知らぬ口は少くとも此の委員会では知らぬ。あまたの海軍の電設技術委員会、これは長あつた陸海軍の技術委員会が今も電設兵器が重要であるといふてあまた。

我々／＼はあつた技術委員会下働いとつたのが今も陸海軍電設技術委員会が偏くことになり、知れぬの中の幹事一人として働いた。

この二方両方の研究のテーマの交換やり方についてのディスカッション、心棒太らせ論現状維持論等、グイグイと下討論が始終行はれた。その次にあまたの陸海軍の技術委員会、これは陸海軍関係の長あつた。この會はわし／＼が知るはあつた作戦上つう、よく知れぬであつた。わし／＼は後から聞いた。この点は長あつた、いはれぬと真相を知らせたいから、あまたの軍部以外から言葉に對して、知達として、さういふはあつた。たうと敵へいゝる一場面である。それから技術院、戦研、この件四件が五件研究問題と提わして幹事をあつた。その結果を海軍の兵器の直接採用してつた。これは或る程度、効果を結合、それから學術振興會、これはあつた潤滑の途とあつた。この委員会は、新らしいテーマはあつた。しかし、これは戦争に入るまで、一番強力な部会、この時、研究の成果の何の／＼が兵器に採用されてつた。その次に文部省の學術研究會、これは我々／＼には遠く大の遠くで終つた。あつた兵器の名前をさういふ

並べ、多々、不研究問題等があるが、これは、わたくしの、缺點であつたし、
思ふが、遂に、知達、には、ペンと来た、で、終つた、り、小から、部外者、の、吸、集、り、
電波、関係、の、大、体、平、名、位、相、当、な、諸、君、が、入、つ、た、し、か、し、その、数、が、た、る、
や、全、件、の、規、模、と、し、は、対、ア、メ、リ、カ、の、戦、争、上、は、こ、れ、が、作、物、の、数、が、た、る、と、い、
知、の、感、じ、だ、ら、う、あ、る、。

次に、組織、上、つ、り、い、つ、と、中、央、と、し、は、航、空、部、隊、と、艦、政、部、隊、の、二、頭、立、で、進、ん、で、
い、つ、は、航、空、も、二、頭、立、で、行、つ、て、ま、つ、た、が、一、昨、年、の、何、月、の、研、究、友、の、試、作、が、
が、備、立、し、て、航、空、と、艦、政、と、を、一、本、に、し、て、小、から、昨、年、の、二、月、十、五、日、に、中、央、行、政、
官、司、の、ボ、ー、ド、に、実、動、部、隊、と、し、の、研、究、陣、容、が、電、波、兵、器、に、関、
し、は、全、く、一、本、に、な、つ、た、と、い、ふ、事、は、恐、ろ、く、あ、つ、た、が、問、題、は、こ、れ、で、な、ら、ず、
便、な、兵、器、の、研、究、も、お、ジ、テ、イ、グ、に、活、用、さ、し、て、ま、つ、た、と、い、ふ、こ、と、で、特、に、こ、れ、
に、重、点、を、置、く、と、い、ふ、動、き、が、あ、つ、た、と、い、ふ、功、能、が、現、在、に、な、つ、た、と、い、ふ、こ、と、
で、ま、つ、た、と、い、ふ、事、は、あ、る、こ、れ、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、的、な、

論断を下すことだらう。

以上を要約して、さうと、波、動、兵、器、関、係、の、技、術、部、門、の、敗、戦、の、原、因、は、ま、づ、
一、統、帥、部、の、自、覺、が、た、か、つ、た、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
し、て、い、く、と、物、を、な、つ、て、行、つ、た、所、に、知、識、の、不、足、が、あ、つ、た、と、い、ふ、事、は、
一、統、帥、部、の、自、覺、が、た、か、つ、た、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
の、誤、り、と、し、て、は、こ、れ、は、恐、ろ、く、以、前、進、進、と、進、む、大、き、な、補、給、で、あ、つ、た、と、
思、ふ、の、軍、が、特、殊、の、も、の、に、應、答、と、言、ふ、も、な、ら、ず、その、台、所、と、掌、る、技、術、面、に、
比、較、し、て、は、一、般、に、あ、る、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
と、素、人、に、子、供、に、一、般、に、あ、る、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
引、揚、が、し、な、つ、た、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
カ、と、軍、に、ガ、ク、を、な、さ、す、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
上、は、強、い、月、の、何、回、の、優、劣、が、部、下、を、派、遣、し、て、ま、つ、た、事、業、完、成、つ、た、と、い、
ひ、つ、た、狂、奔、せ、し、た、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
か、一、般、に、技、術、者、の、狭、量、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、
先、程、の、心、持、太、い、と、い、ふ、事、は、大、変、調、査、の、結、果、テ、レ、フル、上、で、具、体、

内閣閣議録

にしても、これは或は何か問題の解決に役立つかも知れない。今振り返ると、これは部外
者によつて出来たこと、一言葉に於て大勢の人と技術的協力を求める
と、お氣持が非常に不足した。一番上と一番下と両方大きな逆説を
犯してつたが、委員がどう動いても致し方ないものか、作らうかと考へて
くる。再三に技術行政のセクションスルウ 思想である。この現少は遂にわ水
く、小唄をつかぬ、いかぬといふ結論にまで達した。知達も恐らく同じこと
をやつてみたが、どうも思ふ。と、ふつは或る一つの案書に誰と示すといふのも、
いつか前にもして示すといふ恰好で、どうも行くが、日々の行動がとかく
さういつか恰好で、どうも思ふ。と、ふつは或る一つの案書に誰と示すといふのも、
と小唄をつかぬ、イテ不軍一が、非常に出づる。例へば、心構論において然り
部外者の取り扱ひは、おのづから、研究のやうな方において然り、これは我々の
ために、お互ひに、異面目の、口角を、解いて、然るに、馬鹿野郎といはれば、
かりに思ひ合ひ、結局一見が一致した。わ少く、の動き、下を、下を、

たかつた。陸海軍特校集合所、始終喧嘩した。その次に部外者の協力
が、不十分であつた。要するに、ソレは自信があつた。合唱とせよと、全然能力
が、下つた。つてしまふといふこと、痛感した。然るに、何れも、おのづから、
もつた。この、期待が、おのづから、つた。これは、一面、知達の、狭量と、掛合は、つて、
くる問題だと思ふ。
忽ち海軍部、おのづから、罪が、大きいと思ふが、いつも、これは、困る。おのづから、困
るといふ、痛く、思ふ。感、おのづから、敗れた。これは、軍部と、軍部以外との、協
力が、積つて、来た。知つた。軍部の、問題だと思ふ。つて、どうも、いふ、は、い、
は、い、相違、おのづから、少く、は、知、隔、おのづから、本質、的、に、あつた。た、う、と、今、おのづから、
其、おのづから、セ、リ、ン、ト、の、極、端、不、現、小、な、が、事務、の、混、滞、た、か、一、場、試、を、
命、し、て、載、く、の、約、八、月、掛、つた。これは、戦、争、か、あ、ま、る、は、おのづから、
是、物、の、全、体、の、シ、メ、を、い、ふ、と、結局、おのづから、以外、を、信用、する、とい、ふ、逆、徳、が、
け、つ、つた。謙、讓、の、徳、を、おのづから、た、か、が、言、合、ん、た、う、し、ま、つ、て、おのづから、い、ふ、は、おのづから、敗

内閣 閣議 録

戦の原因は、
「はからうか」といふことと、
「たがう」といふこと、
今の如きは、
この五泊に亘り、
準備をいたしました。ある。